

第1回 新カシマサッカースタジアム基本計画検討有識者会議 議事要旨

1 日 時：令和8年8月5日(水) 9:30～11:30

2 場 所：茨城県庁5階 庁議室 及び オンライン

3 出席者：資料3（出席者名簿）参照

4 議事概要：

- 県立カシマサッカースタジアムは、供用開始から30年以上が経過しており、施設の老朽化や年間約8億円の維持管理コスト負担が発生していることなどが課題となっているため、県が新スタジアムの整備に向けた基本計画を策定することとなった。
- 基本計画の策定に当たり、専門的かつ中立的な立場から検討、助言を行うことを目的として、「新カシマサッカースタジアム基本計画検討有識者会議」を設置した。
- 今回は第1回目として、これまでの経緯や前提条件等を共有した上で、基本計画の構成(案)、新スタジアムの整備方針や施設規模、導入機能等について出席者による意見交換を行った。
- 委員からの主な意見については、以下のとおり。

【委員からの主な意見】

●全般

- ・スタジアムは、①競技を行うための施設、②観戦体験を楽しむための施設、③非試合日を含め地域の賑わいを創出する施設、の3つに分けて考える必要がある。賑わいという理念だけでなく、それを実現するための具体的な仕様・設備を検討する必要がある。
- ・にぎわい創出という観点からの性能発注は難しい。公共工事の場合、必ず完成形を考えて逆引きで作っていく必要がある。
- ・新スタジアム内だけに着目するのではなく、鹿行地域における位置付け、周辺まちづくり、交通ネットワークまで含めて議論すべきである。
- ・現スタジアム跡地の検討の主体である鹿嶋市と連携をとりながら新スタジアムの検討を進めるべきである。
- ・大規模な公共投資であることを踏まえ、公共施設・民営施設の役割分担・費用分担を明確化するとともに、地域の現状、現スタジアムを活用したまちづくりで実現できていること、できていないこと、その制約等について分析を深めるべきである。
- ・スタジアムのブランディングや情報発信について、放送・メディアとの連携を含めて検討するが重要である。
- ・ヒト・モノ・カネの課題が進展し、広域連携・垂直連携による公共施設再編整備やそれを契機としたまちづくりなどが求められる中、本件一大事業をその起爆剤として、県・市ともに部局横断的に戦略やコンテンツを結集できると良い。

●基本計画の構成（案）

- ・鹿島アントラーズという強豪クラブが使用する施設であることを踏まえ、芝の養生、メディカル・コンディショニング機能等、チームを強化するという観点も必要ではないか。また、Wi-Fi、放送設備、戦術分析用カメラ等、スタジアムのデジタル化・スマート化の視点も併せて検討すべきである。
- ・選手のための空間整備について、公設で行うのか民間事業者が行うのかという視点が重要である。
- ・計画地の9.6haをどう使うのが大事。スタジアム以外にどのような複合機能をいれるのか、スタジアム周りをどのようにつくっていくのかについては入れ込むべきである。基本計画にしっかり、「にぎわい」をどう創出するのかをいれておくべきである。
- ・現スタジアムは、首都圏から多数の観客が長距離移動して来場するという特徴があり、一般的なスポーツコンプレックスの考え方ではなく、鹿島の特性に即したオーダーメイドの計画とすることが必要である。

●整備方針の検討視点と考え方

- ・地域のシンボルとなるスタジアムとするためには、地域の歴史や特性を踏まえたデザインが重要である。
- ・「365 日賑わうスタジアム」という一般的なモデルに寄せるだけでなく、鹿嶋市の地域特性を踏まえ、新スタジアムを都市インフラとして重点的に整備する考え方もあり得る。具体的には、バスターミナル、非常用電源、DX、データセンター、給電・蓄電等の機能を備え、遠方からの来訪や周辺開発を支える拠点とすることが考えられる。また、企業・技術の集積や国際交流等も含め、複数の「ありたい姿」を検討すべきである。

●スタジアム規模の定量分析

- ・施設規模を考える際はクラブの順位を前提とせず、順位にかかわらず常時満員となる施設を目指すべきである。そのためには、現在の来場者層と今後増やしたい層を明確化し、ターゲットから逆算して施設・観戦環境を検討する必要がある。新スタジアムをにぎわい創出の場にするのだという強い思いを、基本計画の中に反映する必要がある。
- ・ターゲットによって必要な座席種や観戦環境は異なるため、席数と施設規模を単純に対応させず、クラブのマーケティング戦略等も踏まえて検討する必要がある。
- ・国際試合を開催するかによって必要な施設規模が変わるため、どのグレードの試合を開催するスタジアムとするのかを明確にする必要がある。適正な席数としつつ、VIP・ホスピタリティ席等、多様な席種を設ける考え方もある。
- ・国際試合への対応を含め、まず新スタジアムでどのグレードの試合を開催するのかを明確にした上で、必要な施設水準・観客席規模を検討する必要がある。観客席数は大きさを追求するのではなく、機会損失とのバランスを踏まえ、常時満員となる適正規模を目指すことが重要である。

- ・観客席については、日本の場合、高価格帯のVIP・ホスピタリティ席だけでなく、カップルシート、家族席、大人数向けグループ席、個室等、一般の観客席に少しずつホスピタリティを持たせることが有効であると考え。また、日本の利用実態（地方のVIPラウンジは、欧米と異なり、例えば一般企業の社員の方々が利用するパターンが多いなど）や国際試合開催時のVIP対応（各国の王族等を招待する場合）も踏まえ、適切な構成を検討すべきである。

●初期的な導入機能の検討内容

- ・海外事例を参照すると、鹿島のような大都市圏から離れた立地では、医療・教育、都市インフラ、宿泊等の明確なコンセプトを設定し、その軸に沿って付帯機能を検討することが有効と考える。
- ・立地条件のみで集客の成否が決まるわけではなく、明確なターゲットや人を呼ぶための「フック」を設定することが重要であると考え。鹿島アントラーズの既存ファン層等を踏まえた独自のターゲット分析が必要である。
- ・年間を通じた賑わいを創出する複合機能については、既存の地域事業者と競合するのではなく、地域に不足している機能を補完し、住民の暮らしやすさの向上につながり、暮らし続けたいまちづくりに資するものを導入すべきである。
- ・付帯機能の導入という観点では、現段階でのサウンディングは難しい。市と県で連携を強め、民間投資を誘発するような、周辺まちづくりも含め、スタジアムに関する情報を提示していく必要がある。